

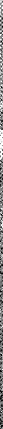
學長 相磯 和嘉

何事であれ、一ゼがあり、アンチデがたい思考方式の違いもあります。論争でした。その論争、問題点の一ゼがあつて初めて物事は進んで、又現体制を維持しようと努力す。指摘の具事とは双方ともに聞然す。

問題提起と理論闘争のつみ重ねで
ありましょう。

事業として始めるならば同窓会は
全面的に支援すると約束してくだ

記憶は昭和三十三年に戻る。当末吉貴爾氏（現住子裴労災病院勤務時、黒田氏も私も医学部の二年生務）と下島隆生（現住第二外科勤務）我々が全く新しい型式で同窓会の
 黒田氏の構想はこうであった。
 （筆者平孝小児科教室）



に居られる黒田鶴氏である。こ
の御向人が、まさに会葬の生女の
親であった。
あつたが、甚し欠のように熱心
その抱負を語り、私の他に二人の
協力者を同級生の中に獲得した。
というのだ。
守り続けてくれたのは、まさに彼
等一人一人のだから。

この同窓会報の誕生を思い起すれば、とても二人や三人の手には「めづるべき波濤」と名づけて年に一を交えてきてくれた歴代の編集員余るように思えた。しかし、彼は「回程度発行している」ところが、達には、あらためて感謝の念を禁じ

か、興味を持って質問される方が、新聞を定期的に発行するには、印刷、数字、前年から、筆、消息、追憶記最近になって幾人か居られたので、費だけでも相当なものに達しなく、等の原稿を会員に授稿してもらい、取材、原稿書き、校正、印刷、配、当時同窓会の事務を担当しておらなつかしく読ませていただいてい、私は今、会報の読者として、配られてくる会報の紙面を、毎号

あたるといふ著しい特徴を持つてそれは逢方もなく大きな仕事のよい聴耳で聞き込んだニュースを可成りの配布洩れも有ったが、こゝろの形骸が、どんなうに思えた。ガリ版刷りのパンフ持つてやつて来た。それは、こんの会報が鎮となつて名簿の整備もいさづつで何時頃から始まつたのレットならともかく、活版印刷のな話であつた。ゐのは同窓会を進み、しだいに配布率も高まつたの

この「ゐのはな同窓会報」は学生を作るつもりだ」という話を打明けた。その時、私は「協力はするが」とだけ答えたように思う。それは小雨の降る朝だった。私の通りにある。最初は、配付方法がまだ寝ている所へ、黒田氏が例も確立しておらず、名簿も不備であ

心緩
健
包裝
三
SAN
子

普通、同窓会報というものは、その名の通り、同窓会によって作られる同窓会の機関紙であるが、墨田氏から、「医学部の学生新聞大偶然がなければ、話はそれで終る。今は今でも記憶に残っている。その名の通り、同窓会によって作られる同窓会の機関紙であるが、墨田氏から、

代徐な
保適用
装 錠 / 5
三共
三共

な会、隨處の上に大きな力となつてゐる。創刊号の編集にたずさわつた一人として、この上なく嬉し
なり、地理的に分離した多島合立止り、またたく間に数ヶ月が空
下版4ページの「ゐのはな同窓会」

心疾

た。紙面も次第に充実し、今では発行されていた。この新聞ももちろんはもとより、全国津々浦々のれ自体すぐれた学生新聞であったと、矢張り資金が大きな壁となつた。同窓会側から小林教授と、

好影
患治

00T 液/

提携 西F

「あのとは同窓会報」も、本号であった。その頃の千葉大学には、後、大分中央病院出張中であるさつた黒田氏の冒の工合は面白かった。第46号となり、齢も十歳を越え「千葉大学新聞」という学生新聞車は回り始めたように見えた。しら良くなった。

影響を
治療育

6ml × 50
イツ・シュワ

創刊の頃

与え
り！

瓶・500
社



3セ

「おののはな同窓会報」





me



~ 9

大参文室のふりかへ参見せられたる。大参ニ云スルノ事人なり等しき事

1

100

「医家必読の有益記事全誌面に満載」

日本医事新報社
東京都千代田区神田駿河台2の9
(電)東京(292)1551(大代表)振替東京25171番


 三共株式会社
 
 提携 西ドイツ・シュワーベ社

37~9

放射線科 算教授

この分野は新しく開発されたもので主として第二次大戦後に発展した学問の領域である。世界的に見ても二十三十年、わが国ではやうと二十五年の歴史しかない。最近装置や医薬品の開発に伴って急激な進歩と一般化の傾向を示し、将来は又診断の短所を補って、大きな分野として診療に利用されるものになると思われる。

もっている。次に放射線科が直し
解決を迫られている点を指摘しよ
う。

二、放射線科の問題点

大学病院の放射線科では主とし
て上述三分野の診療を担当し、放
射線医学教室（医学部講座）では
放射線医学の研究と教育を主とし
て行う。現状では診療科長と講座
主任は同一教授が兼任している場
合が大部分で、混然として一体を
成している。次に放射線科の現状
を述べる。

多数の病院では各科で未だに多
く、少なからずエックス線診断を行
っている。即ち、エックス線診断に
ついて屋上屋を重ねているといえ
る。もしエックス線装置が顕微鏡
のように簡単に安価で誰でも容易
に利用できるものであれば、各科
に顕微鏡などという専門分野は存
在しないし、顕微鏡科という診療
科もない。同じ機械でも放射線装
置は、エックス線装置と違って、

ワークが円滑に進むのである
院における各科のチームワー
クにおいて、患者の病状に
同じであって、患者の病状に
て各科がその守備範囲内で診
行ない、お互に協力して各占
り、ある個人の病気をなす
努力すべきものと考ええる。要
が出来るよう各科が協力すべ
自分の科だけでなく、すべての診療
なかつたことは果して是

(B) 悪性腫瘍以外のもの
三 アイントープ診療

- 6 その他
- 5 女性性器
- 4 泌尿器
- 3 消化器
- 2 胸部(含乳腺)
- 1 頭頸部

(A) 悪性腫瘍

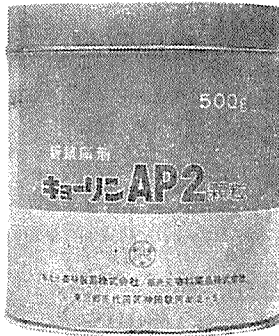
(C) 治療各論

袋に入れるべきである。新しい構想は新しい軌道にのせた方が効果的早く現われるし、成功の確率の多いことは新幹線の例を見ても明らかである。

大学における教育の改革が要求される。医療上の多くの欠陥が認められている現在、出来るものから一つ一つ改革を実行に移す熱意と実行が望まれる次第である。



日本薬学会



新整回性糖尿病治療薬
ゴングアオン錠



東西

南北

鴉
の
森

永祿三年（一五六一年）千葉一族が建てた大巖寺の境内に「かわ

巢は地上二十米程の高さにあり、木の枝や葉で作って住んでいて、天然記念物に指定されている。

れた。大畠、浦和地区の諸先輩が
御出席下さり、千葉市のスライド
側から、人格の形成は教育のみに
解できない、学生と教授会との話
その他、最近の学生の行動は理

しあいにおける学生は無礼はさることながら教授方の

埼玉県では毎年夏に一回総会を開くのであるが、一五〇名ほどの会員でも、集まるのは三千〜四十名ほどで出席率が悪いということである。会場は大宮と浦和と二年交代のこと。埼玉県医師会においては、本学出身者が中心的役割を果しているところである。



ふがいな態度な
 どううも
 じれった
 いなどと
 第三者か
 らの平直
 な意見も

出された
萩原敦
授の実兄
の萩原先
生により
医師会の
こと、特
に埼玉県
医師会

に、菊池先生（S・一六）により、最近の医療紛争の増加や健康保険の水増しなど、医師として不適格な人間が現に存在しており、医師となる前に、何かチェックできるようなシステムはないものかととりたててその必要はないのではとも話しにはさまり、複雑さが増す

伊藤金也



とながらしてきた。

教授方の 井上先生（S・二七卒）などは、自分は学生時代野球ばかりやっていたが、今の学生はラジカルになんていじつた。医師と患者の關係はつきつめていけば、人間対人間の關係であるから、おおらかな気持が必要であり、学生時代好きな道をやれたことが、な意見もとても楽しかったといつておられた。

萩原教 話しは一回につきず、中には、近頃いろいろな先生が本学を去るようだが、本学にはいなくささるがあり、仕事が自由にやれる人がある。残れる雰囲気は欠けているのではないかなどという厳しい意見もでた。

医師会への 医学部のことに、特になかという厳しい意見もでた。

に埼玉県 大学問題、とくに学生と教官に

ゐるのは同窓会報編集部は、例年夏期休暇中に、各地の同窓生を訪問しその御活動や本学に対する御意見などをお聞きし、本学と諸先輩との近密さを計つてきた。今年は学生編集部員四名と顧問の脳研萩原教授と共に一行五人で埼玉県下を左記の如く訪門した。

九月十一日 大宮，浦和地区
九月十二日 熊谷，小川町，秩父地区

高野先生のお宅をあとにし、をた。それによると東北にも同窓生の目は熊谷から一時間ほどバスにゆられて小川町につく。もうまわりは山々である。高野先生（S・一五卒） 嵯川先生（S・一六卒） 谷と合同でゐるのはな会を開いたそ
中島先生（S・二四卒） 大越先生（S・二五卒） 丸山先生（S・二六卒） 出身が多いので、何かと心強い。卒業して初めて大学の後押し
二卒に集まっていたが、いろいろが必要であるということがわかる。昔の先輩、後輩は心のつながりが求職のあつせんをしたらどうか

小川町

また、千葉大出身の医師と他校出身の医師との差なども話題にのぼり、医者がソロバンをはじくようになった時代では、のんびり屋はおかしいといかれてしまうと、いかにも地味な方でのびのびとやっておられる先生方の意見であった。

中島先生は、「気のあう人と治療を共にやりたいのであるが、大学からは人が全然きてくれない。そこで、このめのはな新聞で求人求職のあつせんをしたらどうか」

といふような意見であった。

また、夏の学生実習なども、いろいろと病院にいつているようではあるが、紙面で学生募集病院をとりあげ、実習を通して先輩後輩のつながりを深めていくことなど、具体的な提案がなされた。

大学の後押しという件に関して、は、ジツがとやかくいわれる時つ小川町を後にした。

秩父についたのは予定より大分
遅れて、六時をまわった頃であつた。ひとまず産婦人科を開業なさ
つてゐる岡部先生のお宅を訪問し
た。同行された萩原先生とは同期
であり、まさに二十数年ぶりの対
面とのこと。

ー ションは、いつの時代にあつて
も変わらないであらう。むしろ二
日間の取材旅行ではあつたが、十
三日、岡部先生に三峰山を御案内
していただき、秩父市をあとにし
た。

学生をはじめ大学にいる者すべ

秩父の町では、中を登ること三十分、風光明媚な生方との不断の交流が今後ますます

秩父観光ホテルで行われた

島田通男（S・五卒）、大友太郎（S・一一卒）、小畔養之助（S・一六卒）、岡部博（S・二三卒）の四人の先生達に



集まっていた
 だいた。
 山の上での
 歓談というこ
 ともあるのだ
 ろうか、話は
 五、六人問題な
 ど、大きな話
 題もぼつてき
 た。
 高専学校時代
 など、戦前か
 ら話はさかの
 ぼり、医師と
 しで生きる増光の生活が学ま
 すかえることが、
 どの席でも伝わ



時に「山積」の稿も開いたといふ。山田先生など、それぞ先輩の、千葉時代に、サッカー部や新新聞、山中餐館設など、緑々の活躍をなさつたのである。そして、何よりも強調されたことは若い世代と諸先輩方との意見の交換の必要性であつた。各人名譽にせよ、人としてのコミュニケーションにせよ、人としてのコミュニケーションにせよ、意見をお寄せいただければ幸いです。

(報告 学生編集部)

能谷地区

九月十二日は小雨のばらつく大をさしていた。熊谷には熊谷を後にし、熊谷へとおもむき、谷協同病院に多くの先輩がおり、



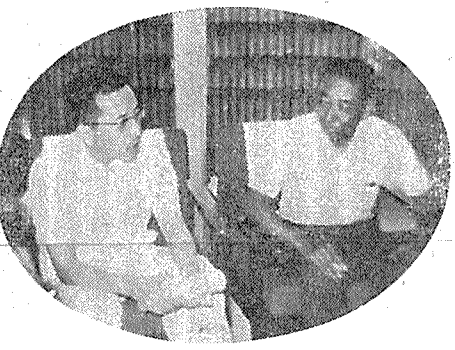
本学出身が十
名ほどおり、一
輪教授、御生
授や北村教授
招いて熊倉の
はなを毎年開
らつてゐるとい
ふ。

秋原教授の一級下である、眼科の
高野先生宅を訪問した。

診療中のところをわざわざ時間
おられた。



先生の学生時
代は終戦直後
あり紙不足で
ったにもかか
らず学生新聞
発行したり、
はりダンスバ



東京・文京・本郷 東京(03)811-1101 振替東京96693

安食正夫 ●A5 頁219 ¥1,800 〒90

末梢血管擴張

〔包装〕 錠 500T, 1000T, 500QT
注 (筋注用) 1×5, 1×50

 **日研化学株式会社** [文献贈呈]
東京都中央区日本橋通1-5

〔健保適用〕